新島襄全集10巻

―新島襄の生涯と手紙―

大鉢　忠

この書は、新島先生が亡くなられた翌年一八九二年にアーサー・S・ハーディーによってボストンのホートン・ミフリン社より英文で出版されたものを、新島襄全集の第十巻として、文学部北垣宗治教授によって日本語訳されたものである。著者はアメリカでの新島先生の恩人であるアルフィーアス・ハーディー氏の三男で、新島先生より四つ年下、ダートマス大学の土木工学と数学の教授、外交官、そして作家としても活躍された方である。彼は原本を執筆するに際し、日本へも来て広く資料を集め、新島先生自身の英文書簡や英文日記を直接引用して、他の伝記物語と本質的に異なる形態で新島先生を表現しようと作家としての工夫を凝らしている。新島先生としては、英文書簡や日記が後日このような形で公にされようとは思ってられなかったはずである。今から考えると、外国との交流のなかったあの時代に、先生がこれだけの英文資料を残され、アメリカで日本のためにと活躍されたことを知るだけでも、感動せざるを得ない。まえがきによると、この書の目的は、キリスト教日本伝道に一生をささげた新島先生の生涯がいかに印象深いものであったかをアメリカ人に紹介することにあり、もう一つの目的は、彼の父の行為を通して父の人物像を息子として表現することにあった。今日この書を評すれば、新島先生に直接接することができる資料を提供してくれることと、日米交流の第一段階の記録としての事実を示してくれていることによって、この書が意義深いものであると言うことができよう。

翻訳者の北垣教授はJ・D・ディヴィス著の「新島襄の生涯」の訳者でもある。長年に渡り夏休みをボストンで過しては新島研究の資料調べを続けてこられた方である。翻訳に当っては、今まで同志社で行われた新島研究の成果を注解の形で豊富に巻末に加えられている。新島先生の亡くなられた九十周年を記念して、五年前に英文原本の復刻版が出版され、我々が原本を手にすることができるようになったが、日本訳が成って、さらに容易に新島先生がどういう方で、何を願ってられたか読者自身が判断できるようになった。この点からすると、今回の出版は新島像形成の新しい局面を開くことになるものと期待できよう。

私が原本に接したのは八年前の夏、アーモスト大学滞在中、文学部の井上勝也先生より貸していただいたのが始めである。当時日本では手に入れることの困難な本であったこと、新島先生の英文のオリジナルであったこ

と、先生が手紙を主として書かれた場所に私が居合せていたことなどから、一気に読んでしまったことを思い出す。それまで読んで知っていた新島伝と異なり、物語としてではなく、歴史的事実として新島伝に接することができ、新島先生がいかに偉大な方であったかを私自身の判断として感じとることができた。このたび、この小文の依頼を受けて夏休みに読ませていただいた。日本語の方が読み易いのは当然で、以前よりも深く内容を理解でき、気の付かなかった事柄など新しい印象を持つことができた。本書の読み方はいく通りも考えることができよう。本文は七章に分けられており、必要な所のみを読んでもよい。例えば、中学校の生徒さんであれば第一章「誕生から日本脱出まで」を中心に新島先生の人間像や、当時の日本社会や日本の近代化の初期の状況、どのようにしてボストンへたどりつかれたのかなど、物語風に読めるであろう。高校生・大学生諸君であれば、新島先生の方が少し年上ではあったが、同年代の新島青年がアメリカでいかなる生活を送ったか、第二章「高等学校・大学時代」は興味深いものになるのではなかろうか。第四章「最初のヨーロッパ訪問」、第六章「第二次欧米訪問」は、紀行文としても面白く、訳本には地図が付されており、ヨーロッパやアメリカへ旅行される人にとって参考になる書となろう。同志社の一社員として第五章「日本における宣教事業」の京都に「同志社」を設立する当時の苦労、国家から独立した学校、キリスト教主義の学校を創設する努力等に感心させられた。新島研究の最も基本的な一級の資料といわれている書なので、研究用資料としての価値ももちろん大きいものである。

私の印象から内容について少しふれておこう。第一章では脱国の理由、青春時代の手記による自叙伝的部分である。「私は西洋の諸国民を、それが外国人であるが故に憎んだし、はじめは西洋語を勉強することを嫌った。」という先生がロビンソンクルーソーの日本語訳を読んで外国を訪れてみたいと考えるようになり、外国に対する知識のほとんどなかった時代に自己の思想を独自に形成していかれた様子が示されており、それを分析していくと先生の人物が明らかになってくるようである。

第二章「高等学校・大学時代」には手紙が多い。ハーディーさんや奥さんへの手紙の中に経済援助に関し、金銭の支出の報告が所々にあり異和感を感じたが、アメリカでの両親役の夫妻への手紙であることを考えると不思議でもないように思えた。アーモスト大学のシーリー教授は新島先生を金に喩え「金をメッキするわけにはいかない。」とアーモストで

（写真説明）
日本での心労を癒すために出かけられた第二回目のアメリカ行きの途中、スイスのサンゴタール峠で心臓発作に襲われ、やっとボストンへ無事着かれた頃のポートレイトである。エッチング画で原本と本書に載せられているものであるが、迫力ある先生の晩年のポートレイトである。アーモスト大学ジョンソンチャペルのポートレイトの原画にも使われた。

の若き新島青年の勉学の様子、生きざまを最大限に評されている。アメリカ独立記念日は夜遅くまで人々は騒ぐ習慣がある。翌朝友人と二人で歩いている近くでかんしゃく玉が爆発し、二人はびっくりしたのであるが、昨夜のかんしゃく玉が忘れたころに再び爆発したことを先生がその友人に授業にでてきたライデン瓶の残留放電と結びつけるジョークを言って、友人を喜こばせたと書かれている。先生がアメリカ式ジョークが言えるほどになっておられたということであろうが、大学で電磁気学の講義を担当している私にとって、新島先生も静電気の実験をアーモスト大学でされていたのだなあと印象深かった。

第三章「アンドーバー神学校時代」は日本からの岩倉具視に引率された使節団との接触やアメリカ教育機関の見学などが書かれている。アメリカで教育を受けた新島青年がいかに自治自立の精神を身につけ、しっかりした行動をしたかが面白い章である。

第四章「最初のヨーロッパ訪問」は田中不二磨理事官と二人でヨーロッパの教育事情視察に出かけた時を示すもので、後日日本教育制度の原形となったとされる遣欧米使節団の欧米教育制度に関する報告書「理事功程」作成に、いかに先生が貢献されたかを知る手がかりとなるものである。ラットランドの教会でキリスト教主義の大学設立をアピールされたことを含め、日本へ帰ってこられるまでが記されている。

第五章「日本における宣教事業は著者による日本の近代化の歴史のまとめから始まっている。日本における女子教育の必要性を考えられたことと、西洋の学問・文明と共にキリスト教が日本人の中にとけ込んでいったことに対する新島先生の貢献が示されている。「ヨーロッパ文明を生み出したものは自由の精神と、科学の進歩とキリスト教道徳であり……科学はキリスト教の基礎の上に築かれていることが分るであろう。」との考え方が記されている。

第六章「第二次欧米訪問」では旅行中の観察記録が面白い。イタリアのトリノ近くのトレ・ペルチェにひと月以上も滞在された時の随想が多く書かれている。「日本人には個性が欠けている。」や「教壇に立つ機会が再び来るなら、クラスで一番できの悪い生徒に特別の注意を払うつもりだ。もしそうできれば教師として成功するだろうと信じている。」等が記憶に残っている。日本のキリスト教主義高等教育のための長文のアピールをボストンで執筆されたが、その中に新島先生の情熱があふれている。アメリカンボードと日本在住宣教師とのパイプ役、同志社におけるアメリカ人宣教師と日本人教師との対立の調整の心労が想像できる。

第七章「晩年と永眠」には大学設立に尽された様子、同志社大学設立の旨意が載せられている。新島先生の人間と社会に対する個人的な、間接的な影響力は……「太陽の運行とともに」広がっていくものである。という文章で終っている。これは注解によると英国詩人テニソンの詩の一行を引用した結びであり、著者ハーディーの作家としての実力を示すものであろう。

「同志社の門をくぐった人は一度は本書か原本に目を通していただければ」という推薦の辞、そして新島資料をこのような形で後世に残してもらった原著者ハーディー氏と全訳を完成された北垣教授への感謝の辞をもってペンを置きたい。

（大学工学部教授）

近代京都と同志社

杉田博明

ダィアグラムという図形の描法がある。あまり詳しくは知らないが、なんでも、時間系列や空間系列などを軸にして、ある事柄を視覚的に表現する方法だそうである。例えば、ある人物について調べようとする。方法として、年表をくることになる。なんとか一通りのことはわかる。けれども、調べているうちに、よりその人物を知りたくなる。そして年表に書かれていなくても、その人物が、単に年表のうえだけでなく、その周りにいかに多くの人物や事柄がかかわっているか、さらにはそれらの人物がいつ、どうして、どこであったのかということも当然のように知りたくなってくる。年表からだけでは、ここまではなかなか教えてくれない。こんなことがいっぺんにわかれば、どんなに便利であろう。

ーと、まァ、ここまで考えて、ふと、思ったのが、ダィアグラムという図形の表現方法であったわけである。

随分と前書きが長くなったけれど、きっかけは、たまたま京都の近代化の歴史を調べていたときにはじまる。

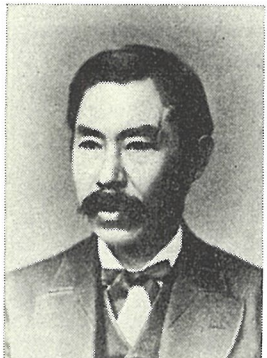
車駕東行によって、大きな危機を迎えた明治の京都。すでに「帝都」ではなくなった京都の復興には、いち早い近代化の取り組みが必要であった。その大きな役割を担ったのが、のち知事となる槇村大参事であった。「市内を挙て職業街として、追年、諸機械を布列し専ら物産しを興隆」「水理を通し、道路を開き、運輸を便に」「広く海外の形勢を示して人智を発明する」と、勧業政策に着手した。具体的には全国に先駆けて小学校の設置をはじめ、博覧会の開設、さらには勧業を進める勧業場、舎密局などの施設の充実にも力を注いだ。この勧業政策は、つぎに赴任してきた北垣国道知事にもうけ継がれる。疏水工事はなかでも、画期的な大事業であった。水力エネルギーを活用して電灯の普及、市街電車の開通へと発展していったのであった。

京都の、この近代化の過程には当然のように、多くの人々のかかわりと努力のあったことはいうまでもない。その群像をダィアグラム的に見ると、意外に、年表のうちに隠された部分が海図のように浮かび、また違った視点での歴史を発見させてくれる。そして、そこには、キーワードとして同志社の存在が大きくクローズ・アップされてくる。

創設者の新島襄が京都に「官許同志社英学校」を開校したのは明治八年であった。前年十一月二十六日に、アメリカ・アンドーバーから『コロラド号』で帰国して、一年一ヵ月後である。福音伝道のための学校設立を願っ

た新島は、はじめ大阪にその開校を予定していた。新島は在米中、政府の視察団の副使として訪米していた木戸孝允とは意気投合した関係から、彼の紹介で大坂の渡辺昇知事に面会して相談。しかし、米人宣教師の雇用問題で、断念せざるを得なかった。

新島は休養を兼ねて大阪から京都へ。観光のあと、やはり木戸の紹介で槇村知事と面談。木戸と槇村は同じ長州藩で知友であった。新島は京都博物館顧問を委嘱され、また政策面での槇村のブレーンでもあった山本覚馬を知る。この出会いは新島にとっては運命的であった。山本は新島の学校設立に賛同して、自分の所有地となっていた相国寺南門前石橋町の「薩摩屋敷」を用地に提供したのだった。新島は山本宅に寄宿しながら、着々と学校設立を勧めた。



新島　襄

山本覚馬はもと会津藩士。鳥羽伏見の戦いに鉄砲隊長として参戦し、捕らえられたが、獄中にまとめた『管見』をはじめ卓抜な知識から京都府に迎えられ、その近代化に太い線を引いた。

新島と山本のもとには、みるみる大望を抱いた、京都の若い俊才が集まった。浜岡光哲、大沢善助、田中源太郎、中村栄助……らである。彼らは当時、まだ情報が乏しかった外国事情から、法律、経済、政治を学んだ。理学者である新島、デビスをはじめアメリカ伝道協会から派遣された宣教医ティラー、ラーネッドらからも、多くの先進的な思想を学んだに違いない。若い彼らはいずれも、政財界のリーダーとして、のち京都の近代化に活躍するのである。しかもそれぞれに横の関連を持ちながら、苦境を乗り越え、新しい事業の推進に取り組んだのだった。

山本覚馬

浜岡光哲は、嵯峨大覚寺坊官の家に生まれた。田中源太郎とは従弟同志であった。『京都商事迅報』『日出新聞』などを創刊したのをはじめ、「京都取引所」「京都商工銀行」、さらには「関西貿易会社」などを設立。明治十五年には京都商工会議所の創立に参画して、延べ四十年にわたって会頭をつとめた。また第一回衆議院議員としても活躍した。田中源太郎は亀岡・馬路の出身。府会議員のあと、浜岡と一緒に第一回衆議院議員に当選、ほとんど行動をともにしながら京都の産業殖産事業に活躍した。北垣国道知事の疏水工事を推進し、京都活性化の原動力となった「京都電灯会社」に、わが国最初の市街電車を走らせた「京都電気鉄道会社」を率先して創設させた。

大沢は、会津藩の人入れを一手に握った大垣屋清八の跡目を継いだ養子。生魚や米穀商のあと区、府会議員となり、疏水工事の常務委員に。時計の製造会社を設立したほか、友人の田中に請われて、京都電灯会社、京都電

気鉄道に参画して京都復興に力を注いだ。

浜岡、田中、大沢はいずれも、山本の私塾で経済、法律を学び、そのゆかりから新島に、多くの影響を受けたのだった。大沢は新島から聖書に触れてキリスト教に傾斜。金毘羅信者の父を説得して入信、キリスト教は大沢の事業と信念を支えることになる。

浜岡、田中とともに第一回衆議院議員に選出された中村栄助もまた、山本、新島の薫陶を強く受けた一人であった。

油仲買いの老舗「河内屋」に生まれ、父の死後、行灯からランプに変わる時代を先取りして石油の輸入販売をはじめる。このとき契約をめぐって米英人経営の商社と、訴訟問題がおこり、敗訴。これを契機に、寺町丸太町上ルに住んだ新島のもとに入った。府会議員のとき、北垣知事の疏水工事に尽力、その許可請願に上京して説得した。田中、大沢と京都電灯、京都電気鉄道の経営にもかかわった。

大沢善助

中村栄助

この中村によって、同志社から大きな転機を得たのが、わが国で初めての両切り煙草『サンライス』を発明し、〝煙草王〟と呼ばれた村井吉兵衛であった。風邪で寝込み、一向に良くならない村井の病状を心配した煙草商の父が、自宅の五条大橋近くに住む中村に相談。村井はその世話で、蛤御門前にあった同志社病院に入院する。退屈な療養の日々の中で、宣教医のベリーから一冊の英書を渡される。『百科製造法秘伝』とあった。村井は、煙草の項を助手の堀医師に翻訳を依頼、新しい煙草の製造法を知り、退院後、初めてアメリカン・スタイルの両切り煙草を開発して、一大財を成したのだった。

山本、新島のもとから育っていった、こうした俊才が集まって、一つの成果を示したのは、明治二十八年であった。おりしも京都は平安京遷都以来、ちょうど千百年目を迎えた。

商工会議所副会頭であった中村はこの節目をとらえて遷都千百年祭を企画立案、会頭の浜岡は記念祭と併せて開催する第四回内国勧業博覧会の誘致に取り組んだ。内国博は明治十年に発足した政府の勧業政策の一貫で、開催年は五年に一回が決まり。第三回まではすべて東京で開かれ、次回は大阪にほぼ決まっていた。浜岡と中村は商工会議所議員の協力とともに誠意と情熱で、その誘致を成功させたのだった。田中、大沢も記念祭を強力にサポートした。もちろん、彼らだけの力でなかったのはいうまでもない。この節目に、実に多くの市民の結集があった。けれども、華やかで、市民を上げての事業の根底に、山本・新島、そして同志社を共通項にもった彼らの、京都を思う強力なチームワークを見逃すことはできないだろう。

今出川通松並木　大正六年大沢善助氏植樹

しかも、それは、教育制度の整備にはじまり、西欧からの技術導入による殖産興業政策、疏水開鑿、水力使用事業をへてきた明治京都の歩みに、一つの句読点を示す事業でもあった。そしてその総決算ともいえる明治末の三大事業に、と発展的に受け継がれていくのである。

明治京都と同志社―といえば、学校設立綱領をめぐっての障害、仏教との対立が語られる。確かにその建学がわが国近代史のなかでも重要な意味をもっているのはいうまでもない。こうした側面で、またそこに繰り広げられた多くの人と人との広がりも興味深い。当時の同志社の米人宣教師たちが、市民にどのような役割をもったのか、あまり語られてはいない。

京都では九年後に、明治二十八年の遷都千百年記念から数えて百年の千二百年記念を迎える。これを機に、京都の近代をふり返えり、ダィアグラムの表現方法による新たな視点で、立体的に眺めて見てみたい。

（昭和三十三年大学法学部卒業・京都新聞社編集局編集委員）

D・W・ラーネッド『回想録』刊行について

D・W・ラーネッド先生は、アメリカン・ボードの教育宣教師として来日、新島先生、J・D・ディヴィス先生と共に、開校直後から半世紀以上も同志社の教育に貢献されました。その間、同志社大学の初代学長を兼務され、神学・経済学・政治学等の学界にも顕著な業績をのこされました。

先生のご永眠四十周年（昭和五八年）にあたり、遺徳をしのぶ事業として、先生が同志社を引退されて帰国されるとき、当時の『同志社新聞』に寄せられた「回想録」等を復刻しました。

回想録　D・W・ラーネッド
ラーネッド先生の「回想録」によせて
……上野直蔵
同志社創立回顧
予が七十年の生涯
ラルネデ回想録
三つの自由を……訳・大塚節治
訣別の辞
編注・解説
ラーネッド先生略年譜

発行者・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課
頒　価・三〇〇円

日本の思い出

ヴァージニア・デイヴィス・ワトキンス・ジョスリン

Virginia Davis Watkins Josselyn

祖父ジェローム・ディーン・デイヴィスが亡くなったのは、私が生まれた年一九一〇年である。だから祖父のことは全然知らない。しかし、両親の話によると、祖父は長崎で赤ん坊の私を好んで膝の上に抱いたらしい。その幼い当時の唯一の記録は、日本人の乳母の背中にいる私の写真である。この写真は六三年後になって、私が新入りの教師として同志社女子大学の一年生たちに自己紹介する際、話の口火をきるものとして大変役に立つこととなった。

ジェローム・デイヴィスのことは記憶にはないが、家族の話を通じて、私には非常に生き生きした存在として感じられる。記憶になまなましい話のいくつかが常に私の脳裡にある。とりわけ、一八七五年の秋に祖父が鴨川へ下って行き、煙突のついた船が見捨てられているのを目にとめた話がそうである。祖母は二人目の子どもを身ごもっていたが、当時は京都に外国人の住む場所を見つけるのは大変困難だった。ジョセフ・ニージマと山本氏の力添えのおかげで御所の敷地内にある空いた屋敷が使えることにはなったが、もちろん暖房などはなく、しかも冬は迫りつつあり、赤ん坊は生まれてこようとしていた。祖父はその大きな空き家を住みよいものにするために気遣った。そして、この捨てられた船から煙突を取り去り、その煙突によって熱を伝え部屋を暖めるヒーターを間に合わせに作ったのであった。その部屋で一八七五年十一月一日に私の父ジョン・マール・デイヴィスは誕生した。当時のことを思うと、私は祖母に対し、そして祖母の勇気に対して賞賛の念で胸がいっぱいになる。父を出産する際に祖母の手助けをしたのは祖父ひとりだったのだから。

もうひとつ私がよく家で耳にした話というのは、祖父が時折四人の家族をヨーロッパ経由で合衆国に連れて行ったとき、いかにうまく家族を小さな部隊に組織し、子ども各人にもいくつかの手荷物を持たせ、責任を分担させたかという、その見事なやり口に関するものである。南北戦争のときに陸軍中佐として奉職したことが、祖父の人格を形成する上での重要な要因となっていた。こうした幾度かのヨーロッパ経由の旅は、父やおばたちの人生をたいそう豊かなものにした。

子ども時代の京都の思い出は数こそ少ないが鮮明である。五歳のとき、ある宣教師の家庭を訪問するために京都へやって来た

ことを思い出す。私のためのベッドがなかったので、同志社女子大学のミス・メアリー・デントンは一緒に寝ようと彼女のベッドに招き入れてくれたのであった。これは奇妙な新しい経験で、私は楽しかった。また、いとこたち――バーネルとジュヌヴィエーヴ・デイヴィス老夫妻の子どもたち――とともに、比叡山に上がってサマー・キャンプをした夏も幾度かあった。われわれは大きな杉の木々の木蔭で、木製の台の上に寝た。お寺の鐘の低い音色を聞いたことや、家族と素晴らしい散歩をしたことを覚えている。周辺には古い寺の遺跡があったので、その地域は私には大変神秘的だった。それからまた、われわれ子どもたちを恐がらせた巨大なむかでのことについてもはっきりと覚えている。父は兄ジェローム（八歳）を勇敢な子にしてやろうと思い、もしむかでをつかまえることができたら五〇銭（当時としては大金）あげようと言った。もちろん父はこの臆病な息子がむかでをつかまえようなどとは夢にも思わなかった。しかし二、三日後、父が昼寝をしていると、兄が駆け寄ってきて叫んだ。「つかまえたよ！つかまえたよ！」兄は五〇銭をもらったのであった。

J. D. デイヴィス夫妻

子ども時代の日本に関する私の思い出のほとんどは、父がＹＭＣＡの主事をしていた東京での一〇年間にさかのぼる。兄ジェロームと私は日本のアメリカン・スクールに通っていたが、当時それは市街をずっと横切って行かねばならない築地に位置していた。何年かは人力車で通い、後には市電を乗り継いで行った。夏にはよく軽井沢へ出向いてボブ・ライシャワーやエド・ライシャワーと遊び、それからわれわれのヨットのある中禅寺湖へ向かった。地震や台風の思い出もまた鮮明である。しかし、思い返すに、私の子ども時代は大変幸福なものであった。母は東京婦人クラブの会員であることを楽しみ、自ら会長を務めて、音楽のプログラムを計画していた。私は今や日本美術史家になったので、アーネスト・フェノロサの『東亜美術史綱』の一組の初版本の中に母の覚書きを見出したことは、胸ときめく喜びであった。この主題に対する母の興味と愛情が、何らかの形で私に受け継がれたのであろう。その当時は、一九七二年に私が夫を亡くした後、京都に戻り、一九七三～一九七四年と一九八〇～一九八二年との間、同志社女子大学で英語を

教えることになろうなどとは知る由もなかった。また、同志社国際高校における日本美術史の授業で、日本に戻ったばかりの自国の文化をよく知らない生徒たちと、日本美術に対する賞賛を分かち合うことになろうとも思いもしなかった。このときにはたくさんのスライドの収集と幼少の頃学んだ日本語のおかげで、この主題を自国への適応を難しく感じている生徒たちに簡単な英語で教えることができた。そしてまた、一九八〇年に同志社チャペルの祖父ジェローム・デイヴィスとジョセフ・ニージマの肖像画のもとで再婚しようことも、その夫ドクター・フランクリン・ジョスリンが一九八二年以降同志社女子大学で教鞭をとることになろうことも、当時の私にはまったく知る由もなかった。

最後になるが、祖父ジェローム・デイヴィスが一〇〇年前ジョセフ・ニージマの同志社創立の手助けをしたことを京都の町の人々に語ると、彼らがいかに暖かい反応を示してくれるかを知って、私は驚いた。京都の人々は皆、その事実を知っているように思われる。そして、それゆえになおのこと、京都は私の人生において非常に特別な場所となり、この国で伝統や祖先の精神が生きている驚くべきあり方に対し、私の心は敬意で満たされるのである。

家族の間で話される祖母に関する逸話には次のようなものもある。祖母は初めて日本にやって来たとき、日本語に精通してはいなかったが、勉強はしていた。夕食に肉が必要だったので、年若いお手伝いさんに夕食のための「ネコ」を買いに行ってくれるよう頼んだ。その少女は困惑した顔をしていたが、やがて猫を連れて戻ってきたのであった。祖母が言わんとしたのは「ニク」だったのである。

（一九八五年五月　京都）

邦訳　吉藤京子（大学大学院文学研究科博士後期課程）

新島襄関係文献（抄）

「新島襄全集」全十巻（刊行中）　同朋舎出版
A. S. HARDY, *LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NEESIMA*　同志社大学出版部
「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意―口語改記並原文―」　同志社
森中章光編「新島先生書簡集」正・続　同志社
同志社編「新島襄書簡集」―岩波文庫　岩波書店
J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」　小学館
「新島先生記念集」　同志社校友会
「明治文学全集　第四十六巻―新島・植村・清沢・綱島集―」　筑摩書房
J. D. DAVIS, *JOSEPH HARDY NEESIMA*　同志社
森中章光著「新島襄片鱗集」　丁字屋書店
森中章光著「新島襄先生詳年譜」　同志社・同志社校友会
永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」　同志社大学出版部
徳富蘇峰著「新島襄先生」　同志社大学出版部
魚木忠一著「新島襄―人と思想」　同志社大学出版部
岡本清一著「新島襄」　同志社大学出版部
渡辺実著「新島襄」　吉川弘文館
同志社社史史料編集所編
「同志社百年史　通史編Ⅰ・Ⅱ」　同志社
「同志社百年史　通史編Ⅰ・Ⅱ」　同志社
和田洋一著「新島襄」　日本基督教団出版局
雑誌「新島研究」　同志社新島研究会

キャンパス計画について

山口祥悟

同志社大学田辺新キャンパスの建設工事は、既に最終段階を迎え、建物の工事についても現在は全体の五十パーセントを終えて、昭和六十一年四月開校に向けて着々と進行しています。

近年、社会の新しい要請に応えるための量的拡大、質的充実をはかる目的で、都心部から郊外へのキャンパス移転が続いています。田辺新キャンパスもその一つですが、新キャンパスの完成により、同志社大学の一層の飛躍が期待できることになります。

郊外に新しく建設されるキャンパスの計画では、都心の既成のキャンパスの整備と異なり、理想的な内容と望ましい姿を自由につくりだすことが可能です。建築計画を担当する者にとっては、この上ない幸運に恵まれたといえます。以下に、設計の基礎となったキャンパスづくりの留意点をまとめてみました。

一、長期拡充計画の必要性

文化の発展、世の中の進歩にともなって長年の間に大学は変化し、拡大します。一般の文化が著しく進歩している時代に、大学が数十年も同じ姿、同じ規模ではあり得ないことは容易に想像できることです。規模の拡大や内容の充実のための建替えなどは常に起こることですから、キャンパス計画をたてるにあたっては、長期拡充計画を常に画がき、増築の必要が起きた際に如何に対応するかをあらかじめ検討しておくことが必要です。

長期拡充計画は、大学のあり方、制度、運営などの基本方針から大学の将来の変化に対する見通しと対策にいたるまで、あらゆる角度から検討され練りあげられたもので、キャンパスづくりの基本となるべきものです。新しい研究活動のために特別な設備やスペースが必要となった場合でも、長期計画に沿ったスムーズな増設が望ましく、そのために、建設工事へある程度の初期投資をすることもやむを得ないことでしょう。

いずれにしても、大学は学生数も次第に増加し、建物も大型化、複雑化する傾向にありますが、その都度、無計画に増築することは絶対に避けなければなりません。欧米の大学には、立派な長期拡充計画を作成し、その基本線に沿って長年にわたりキャンパスを整備した例が多く見られます。

田辺新キャンパスにおいても、これまで何年も検討を進めてきた基本線を、さらに充実させ、定期的に改訂し、今後の施設計画の目標として守っていくことが必要です。

二、キャンパスライフを豊かにする空間

学生達にとって大学の本質が、教育、研究とともにコミュニケーションにあることを考えれば、大学のキャンパスは、教育、研究の場であるばかりでなく教師と学生の生活の場となることが大切です。このことは、都心を離れた郊外のキャンパスも、都会の中のキャンパスも同じですが、周辺に学生の生活する街が形成されていない郊外のキャンパスには、生活の場、ふれあいの場としての役割がより強く求められることになります。キャンパスづくりにおいては、豊かなキャンパスライフが展開されるにふさわしい空間をつくり出すことが最も必要なことです。

田辺新キャンパスでは、先生や学生が豊かな気持ちで学習し、研究に励み、生き生きと活動できる空間をつくることを心掛けました。また、学生が主体的に利用する施設については、自由な発想によって多目的な使い方ができるように設計しました。

三、キャンパス全体の一体感

キャンパスは、大小の教室、図書館、研究室、各種実験室、体育館、講堂などの教育研究施設、食堂、売店、診療所などの福利厚生施設、事務室、守衛所などの管理施設といった機能と大きさの異なる多種多様の建物で構成されています。そのため、キャンパス計画では建物相互の調和が重要なテーマとなります。多くの建物の基本的なデザインが統一され、建物群が一体として感じられることは大切ですが、いたずらに周囲の建物と同様の外観の連続ばかりでは、いかにも退屈なものとなります。

大学構内の建物がそれぞれの機能にふさわしい表情とリズムをもちながら、キャンパス全体としては、一つの美しいメロディーを奏でるような建物配置と建築デザインであることは、良いキャンパスの条件の一つです。

また、田辺新キャンパスの様な傾斜のある敷地では、高い場所から見下されることを考えて、屋根を美しく見せるデザインも欠かせないことです。

四、特色あるキャンパス

大学のキャンパスは、建物群や広場、植栽などによって構成される建築空間が、他の大学のキャンパスとは違った特色あるものとなることが必要です。特色ある空間によってつくられる良い環境が、学生や研究者に対し学問一途に精進できるムードを醸し、また、幾多の卒業生に対しても学園の楽しい思い出を与えることになります。

古来、外国の大学でも我が国の大学でも、特色ある空間をつくるために、モニュメンタルな塔を建てたり、印象的な並木道をつくったり、広い芝生の正面広場を用意したり多くの建築的手法を試みてきました。

田辺新キャンパスにおいては、研究に疲れた頭を休める庭、友と語らう広場、思索にふける散策道などの環境づくりにつとめました。緩やかな勾配の通学路をのぼり正門を通ってキャンパス中央に建つ図書館にいたる空間には、新キャンパスを特色づけるムードが充ちていることが期待できます。

五、郊外につくられるキャンパス

洛南、田辺の丘陵地につくられる新キャンパスは、豊かな自然と広大な敷地に恵まれています。この利点は、キャンパスづくりに十分生かされなければいけません。

周囲の緑と長閑で雄大な田園風景を上手に取りこんだキャンパスは、なにものにも得がたい人間形成の場となりますし、広大なキャンパスは、理想的な教育研究施設を提供することが可能です。また、騒音に悩まされることの少い郊外では、通風や採光のための大きな窓を設けることで光熱費の節減をはかることもできます。一方、自然と共存するために建物の維持管理を容易にする建築的工夫も必要です。落ち葉が樋をふさいだり、野鳥が外壁をいためたりすることは、都会では想像しがたいことです。下宿や通学手段なども十分な検討を必要とする重要な問題です。

また、同志社大学は、田辺への一部移転によりキャンパスがわかれることになりますが、これらのキャンパスの間には、相互に血の通った計画を考えることが必要です。管理面や、カリキュラム、課外活動など運用上のことは当然ですが、キャンパスの持つ雰囲気や、環境にも共通性が感じられるようにすることは、とても大切なことです。

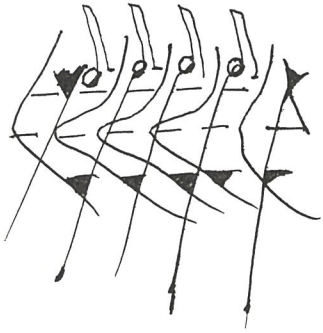
以上、田辺新キャンパスの設計を通して感じたことをいくつか述べてきましたが、具体的な設計手法とその成果についての話は、キャンパスの完成を見た後にしたいと思います。

最後に、私事になりますが、私は、以前大学の卒業論文と大学院修士課程の研究によってキャンパスについて考えてみる機会がありました。私が大学を卒業する頃に、私の師事した先生を中心として母校のキャンパスを整備する委員会が発足し、私も研究活動を共に行うことになったためです。

キャンパスの研究とはいっても、母校をテーマとした問題点の抽出と整備の方向を探るもので、人や車の動態調査を主体とした基礎的データの作成が中心でした。検討内容も、構内に同居する大学病院の扱いと移転の可能性、教養、専門の離れた二つのキャンパスの運用問題、各地の付属研究所の役割と将来、比較的緑の多いキャンパスの環境保存、都心のキャンパス特有の交通問題、公害問題といった事柄でした。私が修士課程を終える年に安田講堂事件が起きて、研究を中断せざるを得ない状態になったのはとても残念なことでした。

その頃学習し研究し、長い間温めてきたことのいくつかが、今回に生かされることになれば、至上の喜びと思います。

（株式会社日建設計、設計部副部長）



「ボクは好奇心の強い犬」

玉田佳子

ボクは好奇心の強い犬、名前を宝玉といいます。当年とって六歳三カ月、正真正銘の男子柴犬です。宝玉という名前はわが家の一人娘のよし子さんが付けてくれました。なんでも中国の物語に出てくる貴公子の名前だそうで、中国趣味のあるよし子さんは、「ホーチャン。お前の名前はおねえちゃんが、（よし子さんはボクに対して自分のことをいつもこう呼ぶのですが、ボクはどうも甘たるくて好きになれません。でも本人がその気になっていますので、そのように呼ぶにまかせています。）命名してやったのよ。物語の宝玉はそりゃあ美男子で、気品があって魅力的なんだから。お前がその主人公にあやかってこんなにハンサムに、（ボクは自分で言うのも恥ずかしいのですが、顔だちは整った方だと思っています。）育ったのは、みんなおねえちゃんのおかげなんだからね。ありがたく思わなくっちゃね。」と恩着せがましく言って、ボクの頭をつるりとなでることを日課にしています。

でもボクの名前を初めて聞いた人は、たいてい、「アホーチャン。」と聞き違えるらしく、その度にうちのお母さんは、「いえ、アホーではなく、ホーです。ホーチャン。」と言い直しています。ボクはそんな時のお母さんの不機嫌な声を聞くたびに、どうしてこれがありがたい名前なのかわからなくなってしまいます。

最初からついつい筆がすべり、ボクのことばかり書いてしまいましたが、今日ボクは自分のことを語るつもりはありません。実はよし子さんのことを少し話そうと思っています。

よし子さんが我が家の一人娘であることは先程述べました。年齢は、実のところボクにもよくわかりません。この前新聞の集金のおにいさんに、「いくつですか。二十五歳ぐらい？」と聞かれた時に、「ええ、まあ。」と答えていましたのに、昨日親戚のおじさんが来て、「よし子も、もう三十ぐらいになったんかいのう？」と言われた時にも、「ええ、まあ。」と答えていたのですから。ただ、「二十五歳ぐらい」と言われた時の方が、その後のよし子さんの機嫌はよく、「ホーチャン、散歩に行こうか。」などと鼻歌まじりに言って、ボクを外に連れ出してくれたりします。どうやら若く見えた方がうれしいらしいのです。人間の女の人は皆そうだと聞きますが、ボクたち犬は自意識とかいうものを持ちあわせていませんので、どう

見えようと一向にかまわないのですが。

よし子さんは今は学校が夏休みなので、昼間はボクと遊んだり、テレビを見たりしていますが、夕食後に勉強と称して、ボクを置き去りにして、室にこもってしまうことがあります。そんな時お母さんは、「おねえちゃんは勉強だから、お室に行って邪魔してはいけませんよ。」と言います。でも見てはいけないと言われるとなお見たくなるのは、人の世だけではなく犬の世の常でもあります。ボクは猫並みに足をしのばせ、こっそりよし子さんの室に近づき、締め忘れたドアの隙間から中をのぞいてみました。よし子さんはドアに背を向けて机の前に座っています。そこでボクはそっと室の中に入り込み、横からよし子さんの顔を見ました。よし子さんは顔を横向きにして机の上にのせ、目をしっかり閉じ、鼻からはスースー息を吐いています。そして半ば開いた口からは、よだれが読みかけの本の上に静かに流れ落ちていました。人間のする勉強というものは、ボクがお昼ご飯の後に、お気に入りの桐の木の下ですることに似ているようですが、ボクたち犬はそんな時よだれなどたらしません。食べ物を目の前にしないでよだれを出すなんて、人間は実に不思議です。よし子さんのしている勉強はむつかしいのだそうですが、ボクにはどうしてもそのようなものには思えないのです。

言うのが遅れましたが、よし子さんは現在同志社女子大学というところで英語を教えています。十八世紀英文学とかいうものを専攻しているらしいのです。ボクには十八世紀といっもて何のことやらさっぱりわからないのですが、何でも十八世紀のイギリスでは動物いじめといって、熊や猫や犬を、ボク自身の口からはとても言えないような残酷な手段でいじめて、それを皆が喜んで見物したといいます。よし子さんが、「お前は二十世紀に生まれて本当によかったわね。ありがたく思わなくっちゃね。」（よし子さんは何でもありがたく思わせたいらしいのですが）と言うのを聞くと、十八世紀というのは、野蛮でちっとも洗練されていない時代のように思えるのですが、よし子さん自身は結構気に入っているらしいのです。「私、ロマンティックなものとか、神々しいものとかは全然肌にあわないのよ。十八世紀のあの猥雑な人間くささが好き。」とか何とか適当なことを言っています。でもボクから見れば、ロマンティックな恋の経験や、魂の洗われるような神聖な体験に失敗したよし子さんの、いわばひがみが、十八世紀のひねくれ加減へと心を向かわせたのではないかと思うのです。もしよし子さんが心の隅に秘かに純なものを残しているとしたら、十八世紀とやらにもどこかに真摯で深遠な部分が押し込められているのかもしれない、とここまで考えて横を見ますと、よし子さんはテレビのお笑い番組を見て、大きな口を開けてアハアハ笑っていました。この時ボクをおそった感情はむなしさというものでした。以来よし子さんに関しては、しばしばこのような気持ちにさせられることになります。

さてよし子さんは、大学、大学院そして今もずっと女子ばかりの中で生活しているわけですが、フェミニズム運動、女性学等人々の目が女性に向けられている時代の中で、もっと女性について考えなければならないというプレッシャーは感じつつも、女

子大で教えることの意義とか心構えなどというものは、もうひとつよくわかっていないようです。十八世紀イギリスのダニエル・デフォーという作家は、当時遅れていた女子教育の振興のためと称し、女大学の設立を奨励しました。デフォーは教養のある女性について次のように書いています。『育ちのよさやしつけのよさに加えて、教養、品行ともに豊かな女性はこの上もない存在である。そんな女性と接することは崇高な喜びであり、彼女の人となりは天使のようであり、彼女のふるまいは神々しくさえある。彼女はやさしさ、美しさ、平和、愛、機知、喜びの権化である。彼女はあらゆる点で我々男性の至上の願いにもふさわしい。そしてこのような女性を自分のものにできる男性は、彼女を恵まれたことを喜び、神にいくら感謝してもしすぎることはないのである。』

この文章を初めて読んだよし子さんは、自分が誉められでもしたかのようにしばし恍惚となったのですが、よくよく考えてみますと事はそんなに単純ではなさそうであり、この文章をそのまま教養ある女性への賛辞ととるか、十八世紀という諷刺と皮肉の時代ゆえ、どこかに作者の偏見やあてこすりが隠されているとみるか、勉強不足のよし子さんは判断に窮しているようです。少なくとも今のよし子さんにとっては、教養ある女性を育てることよりも、現実に授業の中で学生といかに対応していくかといったことの方が、はるかにさし迫った問題なのです。

よし子さんは、学生との間にあきらかに精神的ギャップを感じているようです。それは両者の年齢差から当然のことなのですが、今どきの若い子は……という立場に身を置いてしまえば、腹立たしい事が次から次へと出てくるのは必定のことです。これは精神衛生上はなはだよくないとよし子さんは考えています。そこで目下のところは学生側に身を寄せて、同化してしまおう、その方が楽に授業をやっていけるだろうと考えたようです。よし子さんの口からしばしば、「エッー。ホントー。」などというはしたない言葉が飛び出すのも実はこのためなのです。

でもよし子さんは、いつかこのような立場にも無理がくることをうすうす感じています。そしてその時にはいっそ徹底したいじわるばあさんになって、ねちねちと学生達をいじめることに喜びを見い出そうか、などと考えているようです。これらのことをひそかに独語癖のあるよし子さんは、一人自分の室で壁をにらみつけ、時々にんまり笑いながらぶつぶつ言っていましたので、ボクはこっそり盗み聞きをしてしまいました。

はたしてよし子さんが今後女子大でどんな先生になるか、はたまたどんな研究成果をあげるかは、当人同様ボクにもよくわかりませんが、まあせいぜい頑張ってもらいたいものだと思っています。

なおこの原稿は、本来ならばよし子さんが書くべきものなのですが、何分本人は原稿用紙を前にして二十、三十分うんうんうなったあげく、いつものようによだれをたらして居眠りしてしまいましたので、ボクがこっそり机の上にのって書いたしだいです。何分犬のことゆえ、乱筆乱文のほど、どうぞあしからず。

（女子大学研究助手）

TVドラマ

「女のたゝかい——会津そして京都」

制作余録

西村大介

福本武久著「新島襄とその妻」をドラマ化することになった。朝日放送の創立三十五周年記念番組、放映二時間二十分のワイド企画である。

本年一月、プロデューサーチームの一員に指名された。私が同志社出身ということから母校の関わるドラマに参画させようというデスクの配慮もあったようだ。有難さは半ばで、あとの半ばは通常番組の時と異った緊張があった。「校祖の話を疎かにして呉れるな」という同窓の無数の声が聞こえたからである。

本学出身の作家、福本さんが書かれた原作は、新島襄夫人、八重を主人公に、会津藩出身の彼女が女ながら会津戦争を戦い、敗れて後、兄の山本覚馬を頼って上洛、新島と結婚して、夫と共に建学当時の同志社と関わりながら鮮烈に明治を生きた半生を描いたものだ。

丹念に史実を辿って描かれた労作である。

朝日放送創立35周年記念
ドラマスペシャル
「女のたゝかい—会津そして京都」
放送　昭和60年11月1日　21時2分

スタッフ

制作　八田栄一
企画　株式会社　大広
プロデューサー　西村大介
　　岡本悦治
　　松永英
　　香取雍史
　　松木征二
　　横島良多
原作　福本武久
脚本　安倍徹郎
音楽　渡辺俊幸
監督　永野靖忠

キャスト

新島八重……栗原小巻
新島襄……滝田栄
山本覚馬……平幹二朗
徳富猪一郎……佐藤浩市
山本久栄……杉田かおる
山本時恵……真行寺君枝
松本五平……花沢徳衛

制作　朝日放送
　　俳優座映画放送

二月、脚本を安倍徹郎さんに依頼。主役、滝田栄、栗原小巻決定以来、取材、脚本完成、ロケーション・ハンティング、撮影、編集、と目まぐるしい日程を経て、七月二十五日現在、やっと仕上げの段階に入った。

作品の内容は放映の際のご高覧に俟つとして、以下はTVフレームの外の、いわば画面からはみ出た「ちょっといゝ話」―制作余録である。

雨

今年の梅雨は律義だった。よく降った。言うまでもなくロケーションの多い作品にとって雨は大敵である。梅雨期の制作は無謀とも思われたが、諸々の事情でこの時期をはずせなかった。

六月二十一日、京都でのクランク・イン当日の第一カット。八坂神社の石段を襄と八重がまさに降りて来ようとした時、ポツリポツリと来て、中止になった。

冒頭のカットで出端を挫かれた不吉な予感が不幸にも適中した。それ以降、嵐山、相国寺、田辺……ロケ隊の行く先々、雨雲がつき従った。

監督の永野靖忠さんは晴れ男を以て任じていたが、「今までどんな強烈な雨男がスタッフにいた時にも負けなかったのに―」と何度も天を仰いだ。

スペシャル番組とは言え、スタッフに与えられる制作日数は無限ではない。加えて忙しい俳優さん達の過密スケジュール調整の重圧もある。京都ならではのシーンは所定の期間内に撮って了わねばならない。現場のスタッフ達は、何度も組み替えた苦心の日程を消化することを強いられる。

こうしたストレスが募ったのだろう、三日目、永野監督は腹痛に襲われた。撮影中、屈み込む程の激痛だった。満足な治療を受ける余裕もなく、スタッフ、出演者から差し入れられた各種推せん鎮痛剤・胃腸薬のすべてを義理堅く一通り服用して、幸いにも痛みは治まった。

雨がとどめを刺したのは、一行が東京へ帰ってからである。それもやっとスタジオに逃げ込んでセット撮影に入ろうという時だった。立派に屋根のついた、降ってはならないスタジオを突然、雨が襲った。それも建ち上がったばかりのセットが見えなくなる程の豪雨が―。

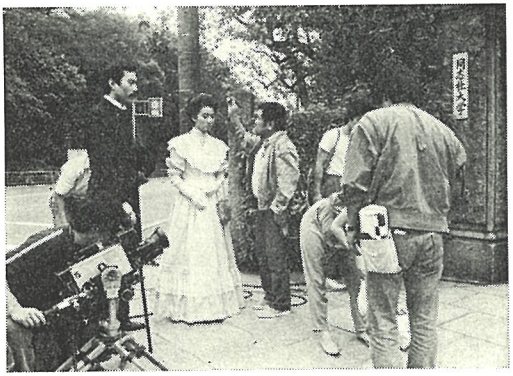
スプリンクラーの故障だった。前日がスプリンクラーの検査日で、その時の処理にミスがあったのだろうという。

びしょ濡れのセットの復旧には相当の時間を要すると思われた。泣くに泣けず、制作担当は、又々日程の組み直しに頭をかかえる。

滝田襄さんと栗原八重さん

新島襄役の滝田栄さんは、ご存知大河ドラマの家康公であり、「料理バンザイ」のホストである。素顔の滝田さんは、ひたすら山登りを愛する清潔な人柄だ。堂々たる風格と共に、教育の理想に燃えた高潔の人

大学キャンパスで



大学正門前でのロケ風景

を演ずるに相応わしい。

苦心のメイクもあって、その、見事な新島ぶりは松山総長からお墨付を頂戴した程だが、滝田さん自身もそれが得意で、学寮のシーン撮影のため田辺を訪れた時のこと――。

控室として借用した国際高校の廊下を扮装のまま歩いていた。そこへ向うからやって来た二人連れの女子高生が、怪訝な表情のまますれ違ったが、突然、大声で「あっ新島先生！」と叫んだそうだ。滝田さん、すかさず振り返って、新島先生然と、「勉強してますか？」とやった。思いもかけず校祖に声をかけられた当の女子高生達の驚きよう、想像に難くない。

原作を読んでその感動からこのドラマ参加を決めたという滝田さんだが、良心碑の碑文「良心を全身に充満したる丈夫の起り来らんことを」に特に感銘を受けた。「いいなァ、と思いましてね、実は自分でこのフレーズを書いて机の上に貼ったんです。」――本番の合い間、スタジオの隅で聞いた話だ。

八重さんこと栗原小巻さんは、スターの風格と身近な気さくさを併せ持った女優さんだ。きびしい日程の中でも終始快活で、スタッフに明るく美しい笑顔をふりまいた。コマキストなる造語を生んだその魅力は今も健在である。

特注の明治時代のウェディングドレスを身につけた彼女の花嫁姿は、既に取材の各社がとり上げたからお目に触れた向きも多かろうと思う。

小巻さんは努力家、頑張り屋として知られている。

劇中、自転車に乗るシーンがあった。自転車といっても明治のもので、チェーンはなく、前輪にペダルがついた、サドルの高い、しかもブレーキがついていないという厄介な代物だ。安全で快適な乗り物とは言い難い。この難物に小巻さんは、乗りこなせるまで何度も挑戦した。跨ったまま足を地面につけられない上、ブレーキがないから止まる時は倒れ込むしかない。地面に敷いたマットを目がけて走って来ては体を投げ出す。擦り傷打ち身も免れない激しいトレーニングだった。

ところで同志社構内ロケの時、撮影の合い間を縫って、滝田さん共々、小巻さんを伴って総長室に伺ったのには、表敬以外に秘かな理由がある。前以てこっそり、総長がコマキストだという情報を得ていたからだ。

スタッフ点描

テレビ美術のジャンルでも明治ものは難

松山総長、滝田栄、栗原小巻（総長室にて）

しい。現存するものも沢山あるだけに時代劇としての嘘もつきにくい。かといって、現存するものは殆んどが老朽化していて、当時の新しいものとして、そのままは使えない。

「結局、殆んど新たに作りました。費用も随分かかりました。もっとも今回は同志社関係など資料が豊富だったので助かりました。」

美術デザイン担当の西亥一郎さんの話である。

西さんは大正十二年京都生まれ。府立三中の出身と聞く。制作初期のロケ地探しの段階から京都を共に歩いた。

撮影も終ろうとする或る日、この西さんが調整室の前で感慨深げにポツリ洩らした。

若王子、同志社墓所を訪ねたスタッフ・キャスト

去年の暮れ、クリスマスに奥さんと共に洗礼を受けられたそうだ。年が明けて早々に今回のドラマの話が来た。新島クリスチャニティとの出逢いだ。「神の導きだと思いました。仕事を通して神への奉仕が出来る喜びを感じています。」

調整室のモニターの画面に、西さん製作になる大磯の百足屋のセットで臨終のシーンの新島襄のアップが映っていた。

脚本の安倍さんは映画・テレビ・舞台に数多くの名作をものして来られたベテラン作家だ。

大のラグビーファンで、そのせいでもないが、今回のドラマの冒頭はラグビーのシーンで始まる。

同志社対慶応の白熱の決勝戦――熱狂するスタンドの応援席に学生達に混じって声援を送る新島襄夫妻の姿がある。

現代にタイムスリップした主人公をいきなり登場させる趣向だ。

この安倍さんに、ふと危惧が生じた。それも、この作品が成功した場合の危惧であ

る。「もし、全国の優秀な高校ラガー達がこの作品に感動したら困るんだ。皆んな同志社を志望して入学してしまったら僕の母校のラグビーはどうなるんだ！」

安倍さんは早稲田の出身である。

右往左往

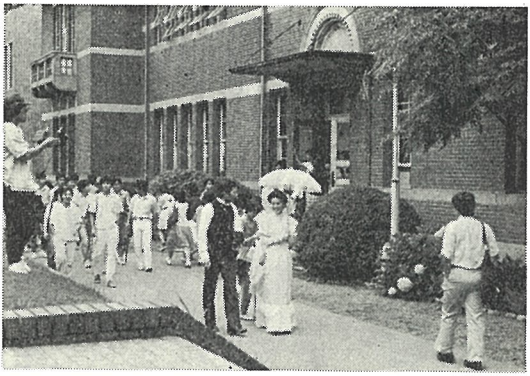
虚構と現実の狭間にいる。

二つの極の間を右往左往している。

TVの番組づくりに関わって以来のことだ。

かつて、テレビの番組が面白くないということから「いっそ繁華街に置きっ放しのカメラの映像を見せて呉れたらどうか」と手厳しいTV評と共に、或る示唆を与えて下さったのは恩師木村俊夫先生だが——何もつくらない、ありのままの状態を一方の極、現実（ノン・フィクション）とするなら、もう一方の極、虚構（フィクション）は「創り」「飾り」「ドラマティック」……ということになろうか。

実際のテレビの画面には、雑多に双方の要素が絡み合って様々のバランスで番組という形になって現れる。



女子大学ゼームズ館前でのロケ風景

このドラマ制作中にも、「永野会長刺殺」があり、「聖輝の結婚」があった。いずれもノン・フィクションとはいえ、極端にフィクショナルな要素の強い大事件であった。

「永野刺殺」のニュースを見ながら、仕事仲間の或るシナリオ・ライターが（私は一方で「ザ・ハングマン」というアクションドラマを担当している）「こういう筋書きをシナリオに書いて来たって、殆んどのプロデューサーは『こんな唐突なことはあり得ない』とか『リアリティに欠ける』とかいう理由で原稿を突き返すだろうな」と呟いた。

実際、この事件といい、先頃の「ロス疑惑」といい、シノプシス乃至構成、キャスティングなどの点で虚構を凌駕している。

この際「事実は小説より奇」を「ニュースはドラマよりフィクショナル」と言い換えようか。

実は以上のような話をスタジオへ陣中見舞に来られた原作者の福本さんとひとしきり話し合った。

ところで「女のたゝかい」での私達の仕事は、福本さんの原作があるとはいえ、先ず、新島襄・八重のノン・フィクショナルな実像に迫るところからスタートした。再三に亘る京都・会津の取材、蒐集した資料に基いて、脚本の安倍さんは精密な襄・八重年表を作成された。二人の節々の出来事はもとより、同志社関係、親族関係の仔細な記録に及ぶもので、背丈に余る長篇であった。このノン・フィクションからドラマ

ティックな、フィクショナルな、要素を抽出する。それが不可能な場合、又はこの要素を見付け得ない場合は、それを創り出すのだが、素材である主人公達が、明治という、近い過去の有名人で、或る種、神格化された人物であってみれば、フィクションの、嘘のつける範囲にもおのずと限度があろう。安倍さんのご苦労の第一は、その辺にあったと思われる。

田辺校地内第二寮前でのロケ風景

理屈はともかく、十一月一日ヨル九時、ご喧伝の上、出来るだけ沢山の方に見ていただきたい。テレビの作品は放送で多くの人に見られてこそ、完結すると思うからだ。

◇

長期に亘る制作期間中、各方面から大変なご支援をいただいた。

特に同志社当局の全面的なご協力なしには、今回の作品の成立すらかなわなかった。松山総長はじめ本部、各現場のスタッフ諸氏に改めて厚く御礼申し上げたい。中でも取材にあたって貴重な資料をご提供戴いた上、細部に亘るご教示を戴いた資料室の河野昭仁先生、大先輩武間富貴さん、早朝から深夜に至るまで撮影現場に立会いお世話戴いた庶務課の岡部洋さん、学内の様々な仲介の労をとって呉れた二十年来の畏友尾崎寔女子大教授、番組宣伝に積極的にご協力いただき、今後もお世話になるであろう、校友会・同窓会の関係各位には、誌上を借りて、特に御礼申し上げたい。ありがとうございました。

そして――、構内の撮影にあたり、エキストラとして労を惜しまず参加協力して呉れた現役の学生諸君、ありがとう。何回ものリハーサル、本番、NGのあと、やっと最後のカットのOKが出た時、滝田、栗原お二人の周囲に期せずして学生諸君から盛大な拍手が起こった。普通のロケ現場では見られない心暖まる情景だった。後でお二人共々その時の感動を話して呉れた。

滝田さん宛に最近、手紙が寄せられた。構内ロケに参加の学生さんからだ。

「……在学中、新島先生ご夫妻のドラマに、ああいう形で参加出来て大変幸運でした。いい作品になるよう心からお祈りします……。」

ご期待に応えたいものである。

（昭和三十五年大学文学部英文科卒業・朝日放送株式会社テレビ制作局プロデューサー）